スポットライト

公認八段位に 相原智之氏

2020年11月15日、大阪市にて実施された公益財団法人全日本空手道連盟公認八段位審査の結果、相原智之氏（59歳、大阪産業大学空手道部監督・日本空手協会四條畷支部師範）が合格された。2月吉日、相原氏が監督として指導する大阪府大東市の大阪産業大学空手道部にうかがい、超難関の狭き門を４回目の挑戦にして合格された喜びの声をお聞きした他、1989年の国体で形・組手のダブル優勝、1990年にはWUKO世界選手権大会個人形優勝など輝かしい戦績を誇る空手道人生についても振り返って頂いた。

文・構成＝寺島 孝博

活発で運動神経も良かった相原少年

大阪市の最も東に位置する鶴見区で生まれ育った相原氏。父親は電電公社（現 NTT）に勤め、母親は大阪市交通局のバスの乗務員だった。２人兄妹で、幼少の頃から活発だったという。「住んでいた地域は住宅地でしたが、当時はまだ田畑があるのどかな街でした。秋には近所の田んぼに稲刈りをした藁が積んであり、それをマット代わりにして宙返りとかして遊んでいました。**子どもの頃から瞬発力があり脚も速い方で、運動神経は良い方でしたね**」（相原氏）。運動が得意だったこともあり、子どもの頃はテレビなどでのアクションスターや体操の選手に憧れていたと相原氏。

空手は中学校１年から始めた。「それまでは、テレビでの柔道一直線を見て興味が湧き、柔道をやりたいなと思っていたのですが、近所に住んでいた同級の徳野善彦先生（拓殖大学 OB、現・日本空手協会茨田支部師範）が空手をやっていて、その影響で故・岩渕弘師範の道場（日本空手協会大東支部）に入門したのです」。

空手指導者への憧れ

道場で空手をやりながら、中学校では２年の途中からラグビー部に入った相原氏。「脚が速かったのでポジションはウイングをやり、中体連の大阪大会で優勝し、近畿大会でベスト４になりました」。

空手は火・木・土の週３回が稽古日で、すぐに順応していったという。「岩渕師範は基本の徹底と人づくりを重視されていました。始めた頃は**自分の手足を縦横無尽に動かすために鍛錬し、徐々に完成されていくことがすごく楽しかったですね**」。

高校は大東市にある府立野崎高校に入学し、ラグビー部に入ったが、道場との両立は難しくなり、２年の途中でラグビーはやめたという。「高校に空手道部はなかったのですが、２年生の時に小山正辰（まさし）先生（元世界チャンピオン、立命館大学 OB、現・森ノ宮医療学園ランゲージスクール校長）が体育の教員として赴任されてきて、放課後や休み時間に稽古をつけてもらいました」。高校在学中は、日本空手協会全国大会で形・組手ともに優勝の実績がある。

また、高校に入り、将来的には大学に進学して空手をやりたい、そして体育の教員になりたいなと思っていたという。「とにかく、**空手の指導者になってみたい**、そう思っていたのです」。

高校時代の相原氏（右）。「空手を始めたのはブルース・リーや空手バカ一代の影響もありました」。

「学生の指導については、実績を高めて全国に大学の名を轟かせたいのですが、やはり４年間を通して社会人としての基礎力を身につけて欲しい」と相原氏。

Profile
相原　智之(あいはら　ともゆき)
昭和37年3月23日、大阪市鶴見区出身。大阪府立野崎高校を経て拓殖大学卒業。昭和49年、中学校1年生の時に、故・岩渕弘師範(日本空手協会大東支部支部長、日本空手協会大阪府本部長・大阪府会長・近畿地区本部本部長を歴任)に師事し空手道を始める。
拓殖大学在学中は全日本学生選手権にて個人形を連覇。大学卒業後にナショナルチームに所属し、1989年の第44回国民体育大会(北海道)では、個人形と無差別級組手のダブル優勝。さらに1990年の第10回WUKO世界空手道選手権大会(メキシコ)では、個人形で優勝。現在、学校法人大阪産業大学職員・空手道部監督。
(公財)全日本空手道連盟公認八段。全日本空手道連盟二級資格審査員。全日本空手道連盟全国組手・形審判員。(公社)日本空手協会七段。(公社)日本空手協会A級審判員・A級指導員・A級審査員。奈良県空手道連盟理事・県強化委員・県強化コーチ。日本スポーツ協会公認空手道コーチ4。

拓大での濃密な４年間

大学進学にあたり、全国の色んな大学から声がかかったという相原氏だったが、「京都の津山捷泰(かつひろ)先生(拓殖大学OB、全日本空手道連盟副会長、京都産業大学空手道部師範兼男子監督)から、強い大学でやりたいのだったら拓大だぞと言われ、岩渕範師の勧めもあり、東京の拓殖大学に進学しました」。

それまでは、道場のみで空手をやっていた相原氏。学連の厳しい稽古とともに、寮生活での上下関係の厳しさも味わったという。「特に組手練習は、現在のように安全なものとは言えない時もありましたが、ここは将来指導者となるためには、自分の登竜門だと思い、しっかり技術を身につけて卒業するという信念を持って稽古に励みました」。

また、現在まで**空手をずっと継続してこられたのは、学生時代の基本稽古の積み重ねと指導して頂いた技術の高さの賜物**だと話す相原氏。「当時師範は津山捷泰先生の兄・津山克典先生(拓殖大学OB、元全日本空手道連盟ナショナルチーム監督)でしたが、津山師範の精度の高い技を完成させることには妥協を許さない指導と、津山捷泰先生のアドバイスがなければ、今の自分はなかったかもしれません」。

ナショナルチームの一員に

拓殖大学では体育学部がなかったために、入学後は体育の教員になることは諦め、卒業後は大阪の大東市で公務員になることを考えていた相原氏。だが、４年生の時には採用試験がなく、大東市の非常勤嘱託職員として採用された。

「４年間、市の体育館での管理業務などをやりました。空手に関しては、大学で存分にやったので、就職してからは**選手としてではなく、自分のペースでできる範囲でやろうと思っていた**のです。その後、津山捷泰先生にナショナルチームを受けないかとお誘いを頂き、1986年に形で選考され、２年後には組手でも選考されました」。

大学在学中、個人形種目が導入されて最初の全日本学生選手権個人形を優勝(1984年)。翌年も連覇した。

大学時代は、団体組手のメンバーとしても活躍した。写真は東日本大学選手権団体組手戦に出場した時のもの。左端は当時の津山克典師範。

1990年、第10回WUKO世界空手道選手権大会(メキシコ)個人形で優勝。

「できることであれば、学生には空手を継続して生涯空手としての良さを味わってほしい。その手助けをしたい」と相原氏。

相原氏は、大学での監督業とともに、道場（日本空手協会四條畷支部）でも子ども達からシニア世代まで指導している。

大阪産業大学で指導の道に

1989年には、大東市にある学校法人大阪産業大学の事務職員として採用された。その年の**第44回国民体育大会（北海道）では、個人形と無差別級組手のダブル優勝**という記録を残した。国体での形・組手の同時優勝は、後にも先にも相原氏以外に出ていない。さらに、1990年の**第10回 WUKO世界空手道選手権大会（メキシコ）では個人形で優勝**を果たし、この2年間が相原氏の選手としてのピークといえただろう。

また、入職後しばらくは、空手道部には携わらなかったが、1996年にコーチに就任し、2006年からは監督を務めている。「業務で指導に行けない時もあることから、6年前より稽古時間を夕方から朝7時にシフトしました。2時間弱の短時間の練習ですから、3～4時間やっていた練習メニューをただ半分にするのではなく、他校にも引けを取らない質と集中力を持つことで、去年と一昨年の全関西大会は女子団体組手で3位に入賞するなど効果は上がっています。朝練に切り替えてからは、授業の出席と単位取得率が高くなり、公務員や教員の採用や優良企業に就職する部員が増えました」。

4回目の挑戦で全空連八段合格

「4回目の挑戦でしたが、今回の審査は自分なりに感触というか自信はありました。昨年は、コロナ感染の影響で4月から6月までは道場（日本空手協会四條畷支部）の活動、また大学での稽古もできませんでした。そこで、自分自身でほぼ毎日1時間ほど、**基本と形をみっちり稽古し、形の真髄を自分なりに極めたというか、とにかく全ての動作を妥協することなく100％の力を出して稽古しました。**それが審査への自信になったと思います」。

人生を豊かにしてくれる道

改めて八段位合格について相原氏は、「元気に産み育てくれた両親、側面から支えてくれた家内、そして全日本空手道連盟、日本空手協会をはじめ空手関係の諸先生方、また勤務する大阪産業大学など、多くの方々のおかげだと心より感謝申し上げたい。**空手とは、自分の人生を豊かにし、自分を成長させてくれる道です。**松濤二十訓にある「空手は湯の如し 絶えず熱度を与えざれば元の水に還る」。努力の積み重ねがやがて大きな力、自信となる。今後も体力の続く限り鍛錬していきたいです」。（完）

大阪産業大学空手道部の皆さん。前列左から4番目が香川政義師範（NPO法人日本空手松涛連盟西大阪支部支部長）、左隣が井上幸子コーチ、相原監督の右隣が戎寛太コーチ。